



TITLE:

徳川時代ニ於ケル封建的都市ノ發達

AUTHOR(S):

瀧本, 誠一

---

CITATION:

瀧本, 誠一. 徳川時代ニ於ケル封建的都市ノ發達. 經濟論叢 1918, 6(5): 637-648

ISSUE DATE:

1918-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127379>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

# 經濟論叢

第六卷 第五號

大正七年五月一日發行

## 論說

生產政策力分配政策力……………法學博士 河上肇

所得稅ニ於ケル所得ノ統一課稅(一)……………法學博士 神戸正雄

德川時代ニ於ケル封建的都市ノ發達……………法學博士 瀧本誠一

經濟的行爲ト道德的行爲トノ關係(五)……………法學博士 田島錦治

諾威ノ海運(一)……………法學士 小島昌太郎

露國ニ於ケルまゝるくす說ノ發達(二)…………… 米田庄太郎

我國<sup>ニ於ケル</sup>營利心ノ起源及發達(四、完)……………文學士 銅直勇

## 時事問題

日用品市場ニ就テ……………法學博士 戸田海市

## 雜錄

南露ニ於ケル獨逸住民(一)……………文學士 長壽吉

續獨逸經濟學界近況(三、完)…………… 米田庄太郎

大阪市ニ於ケル窮民ノ家計(三、完)……………法學士 櫛田民藏

帝國統一後ノ獨逸ノ植民の活動(三、完)…………… 山本美越乃

米國ノ戰時租稅法(三、完)……………在米 阿部賢一

# 徳川時代ニ於ケル封建的都市ノ發達

瀧 本 誠 一

都市ノ成立ニ關シテハ歐洲ノ學者間ニ種々ノ説アリ、要スルニ各々其ノ所論ノ立場ニ依テ其ノ意見ヲ異ニスルニ過ギス、例ヘハふらつシハ專ラ佛國人ノ立場ヨリ之ヲ看察シテ都市ノ濫觴ヲ羅馬ノ遺制ニ歸シ、宗教上ノ元素ニ重キヲ置キ、ふをん、べろうハ主トシテ獨逸ノ都市ヲ論ジ、農村ノ自治體ヨリ發達シタル行政團體トナシ、又英國ノ學者ハ多ク商賈組合若クハ市場組織ニ淵源スルモノトスルカ如ク、皆各々其ノ説ヲ異ニシテ更ニ歸一スル所ナシト雖、吾人ヲ以テ之ヲ見レバ都市ノ濫觴ニ關シテハ他ノアラユル大制度ノソレノ如ク、原來一般ニ通スル一定ノ原因ナルモノナク、國々所々ニ依ツテ其ノ成立ヲ異ニスルモノト認ムルヲ以テ穩當ナリトスベシ、然レドモ歐洲ノコトハ且ラク措キ、我日本ニ於ケル現在ノ都市ニ就キ一々其ノ沿革ヲ審ニシテ、之ガ創始ノ原因ヲ探究スレバ或ハ神佛ノ所在ニ基因スルモノアルベク伊勢山田ノ如キ是ナリ或ハ商業上ノ便利ニ依リシモノアルベク泉州堺ノ如キ是ナリ又或ハ行政官衙ノ設置ニ伴ヒシモノアルベキモ筑前福岡ノ如キ是ナリ賴朝以來武門ノ世ノ中トナリテ、新ニ成立シタルモノハ、特ニ軍事上ノ目的ニ出タルモノニシテ、ソレガ今日ノ都市ノ基礎トナリタルモノ、決シテ鮮ナシトナサザルベシト信ズ、でうゐつと、ひゆうむ

(1) Flach's Origines de l'ancienne France.

(2) Von Belows Der ursprung der deutschen Stadtverfassung.

曾テ曰ヘルコトアリ、「陳營ハ都市ノ母ナリ」ト此ノ言ハ歐洲ノ歴史ニ就キテモ多少根據ナキニアラサルコト勿論ナレドモ、我國鎌倉以後ノ事實ニ徴スレバ一層其ノ言ノ適切ナルベキヲ疑ハサルナリ。

我國ハ鎌倉開府以來世々唯一ノ武斷主義ニ依テ支配セラレ、遂ニ降テ徳川氏ニ及ヒ歷史上未曾有ノ軍事の封建制度ヲ出現スルニ至リシカバ、當時所謂大名ノ居城即チ大小ノ都會ハ皆悉ク軍事上要害ノ位地ヲ擇ミタルモノニ外ナラズ、勿論或ル場合ニ於テハ自然ニ商業地トシテ既ニ多少ノ發達ヲナシツツアリシ地點ヲ選擇シテ、ソコニ城廓ヲ築キタルモノナキニアラザルモ、<sup>(3)</sup>原來大名ノ居城ハ則チ永久的ノ陣營ニシテ、専ラ要害ノミヲ目的トシ、商工ノ便不便ナドハ更ラニ少シモ考ヘザリシノミナラズ、故サラニ天險ヲ唱ヘテ山河ニ取圍マレタル往來不便ノ土地ヲ擇ミタルコトハ、吾人ノ辯スル迄モナク著明ノ事實デアル、故ニ我國ノ封建時代ニ於ケル都市ハ僅々少數ノモノノ外ハ殆ント皆軍事の都市デアツテ、商工ノ必要ニ應シテ其ノ便利ノ地點ニ成立シタルモノニアラザルコトハ、是レ我カ經濟史上最モ注目ヲ要スル特徴ナリト云ハザル可ラズ。

あしゆれー氏曰ク「中世紀ノ都市ハ商業及製造ノ生家デアル、都市ノ繁榮ハ近世ニ於ケル國家成立ノ一大原因デアル」<sup>(4)</sup>ト眞ニソノ通りデアツテ都市ノ發達ガ近世の文明ノ萌芽デアルコトハ何人モ疑ハザル所デアル、然ルニ歐洲ニ於テハ封建制度ノ瓦解後其ノ都市ハ成立ノ濫觴如何ニ拘ハラズ、

(3) 大阪ノ如キ是ナリ

(4) Surveys, p. 168.

皆悉ク商工ノ利害ヲ重大視シ、其ノ行政ハ總テ商賣團體ノ手中ニ歸シ、市場法即チ都市法デアルノ觀ヲ呈スルニ至リシカバ、其ノ結果歐洲ノ經濟界ハ各都市自ラ自由獨立ニ活動シテ、大ニ發達ヲ遂クルノ便ヲ得タリト雖、我國ノ都市ハ之ニ反シ強固ナル封建制度ノ下ニ立チ、商工ノ利害ハ全然之ヲ無視セラレ、夫ノ經濟問題ナドハ絶對ニ之ヲ排斥シツツアツタ武家武人ノ勝手ニ一任シテ居ツタモノデアル、之ヲ約言スレバ我國ノ都市即チ大名ノ城下ニ於テハ軍法ガ都市法デアツテ行政上一切ノ事ハ實際總テ埒モナキ舊式ノ軍制ニ法リタルモノノ如シ、或ル書ニ「諸侯ノ國多ハ我カ城下ニ諸士ヲ聚メテ居ラシメ玉フハ如何ナル故ゾヤ、或説ニハ國初ノトキハ諸侯城下ニ諸士ヲ聚メ置キ、公ニハ東都ノ制ニ從フト見セ、私ニハ天下ニ事アルトキハ時日ヲ回サス舉用ユルニ便ナリトシテ如是成シ置レシカドモ、天下太平ニ歸シテ重テ干戈ヲ動スコトナク、當時治道ヲ論スル者ナケレバ、軍中ノ法令ヲ其ママ治國ニ採用ヒテ、改メテ治國ノ制度ニ建カヘ、永久ノ策ヲナスコトナク、徒ラニユキナリニ因循シテ二百餘年ヲ經タリ」トアルハ正サニ此等ノ事實ヲ證言スルモノニシテ、我國封建時代ノ都市法ハ歐洲ノソレノ如ク市場ニ支配ザレタモノニアラザルコトハ明カデアル

福田博士ノ日本經濟史論(一六六)ニ都府には封建の法  
制行はれずト云ハレタルハ我輩ノ同意シ難キ所デアル

是レ我國ガ歐洲ニ比シテ經濟的發達ノ大ニ後レタル一原因ナリト云ハザル可ラズ、然レドモ又他ノ一方ヨリ之ヲ看察スレバ、大名ノ城下ハ一般ニ人口ノ繁殖スルト同時ニ漸々大市場ノ形ヲ具備シ、經濟上分配及消費ノ中心トナリテ各地ノ

(5) 此ノ書ハ余ノ收藏スル所ニシテ著者ノ名ヲ署セズ又書名モナク何人ノ作ナルヤ明確ナラザレドモ其ノ内容ヲ熟讀スレバ有名ナル長州ノ學者村田清風ノ遺著ナルベシト推定セラル

農産物ヲ吸集シ、又農民ニ必要品ヲ供給スル場所トナリタレバ城下ハ何レモ前記ノ如ク、儼然タル陣營ノ姿デアアルニ拘ハラズ、其ノ經濟上ノ發達ニ貢獻シタルコト、亦決シテ鮮ナシト爲サザルナリ、吾人ハ今此ニ所謂ル大名ノ城下ト其ノ農村トノ關係ヲ略述スベシ。

鎌倉開府以前ハ我國モ亦支那ト同シク「兵ヲ農ニ寓ス」ト云ツテ、士農ノ別ヲ立テズ、兵士ハ皆農民ヨリ徵發シタルモノデアツテ、一朝事アル時ハ倔強ノ百姓ヲ撰拔シ、以テ攻守ノ備ニ充テタルモノナレバ、當時別ニ侍ト稱スル一階級ノ無カリシコトハ明カナル事實デアアル、然ルニ天慶ノ亂後、世ノ中ハ漸ク封建ノ萌芽ヲ發シ、將帥ノ職ハ皆藤氏若クハ源平二氏ノ譜代ヲ以テスルコトトナリ、所謂ル世官世祿トナリシカバ、其下ニ隨從スル兵士等モ亦譜代ノ屬兵トナルニ至レリ、夫ノ鳥羽帝ノ時屢々制符ヲ下シテ兵士ノ源平二氏ニ屬スルコトヲ禁セラレタルハ之カ爲メデアアル、然レドモ此ノ時代ニ於テハ士農ノ區別未タ明確ナラズ、歷々ノ武將ニハ平素其ノ左右ニ若干ノ武者ノサムライ(侍)居タルコト疑ヒナキモ、多數ノ武者共ハ皆夫レ其ノ知行所ニ住居シテ、農業ニ從事シ居タレバ、當時諸方ニ割據シタル豪族ハ、取リモ直サス百姓ノ頭領デアツテ、眞ニ所謂土豪タルニ過ギザリシナリ、其後賴朝ノ天下トナリ、鎌倉ヲ以テ中央政府ノ所在地ト定メタル時ニ於テハ武將ハ特別ノ任務ヲ帶ヒテ、他地方ニ駐屯スル者ノ外、大抵鎌倉ニ邸宅ヲ有シテ、都住居ヲ爲シツアリシモ、其ノ配下ノ武士ハ、矢張其ノ知行所ニ在リテ、農民ト雜居シ居タルモノ

(6) 士(侍)ト云フ一ツノ階級ハナカリシモ士農工商ノ如キ職業ノ別ハ上古ヨリ之レアリタルモノノ如ク思ハル然レトモ其時代ニハ士ヲ物部ト云ウタルナリ(湯土問答)

デア<sup>(7)</sup>ル。

徂徠等ノ記スル所ニ依レバ士農ノ分離ヲ來シタルハ北條時賴以來ノコトナリト云ヘリ、成ル程其ノ時分ニハ此ノ區別稍々分明ニ實現セラレテ、武將ニ屬スル侍ノ多クハ次第ニ其ノ主人ノ膝下ニ定住スルノ傾ヲ生スルニ至ツタノデアル、蓋王朝時代ノ如ク幾十年カノ間ニ於テ、偶マニ兵役ノ事アル位ナレバ、其ノ必要ノ際ニ、農民ヲ蒐リ集メテ就役セシムルコトモ、敢テ不便トナサザリシナルベキモ、源平以後年々歳々干戈ヲ動カスノ必要アリタルノミナラス、實際之ヲ動サザルモ平生何處ニ如何ナル敵カ現ハルルヤ圖ラレズ、寛治元年三浦泰村等が北條時賴ヲ滅サント計リシカ如キ是ナリ武士ハ常ニ甲ヲ擧シ戈ヲ枕トシテ眠ルト云フガ如キ世ノ中トナリタレバ、出來得ル限り多クノ兵士ヲ身邊ニ常備シ置クノ必要ヲ感ジ、遂ニ所謂ル武將即チ諸大名ハ鎌倉ニ在番スルトキト其領土ニ歸還スルトキトヲ問ハズ、常ニ其ノ膝下ニ多クノ親兵ヲ聚ムルニ至シタノデアル然レドモ彼等カ各々其ノ在所ニ堅固ナル城砦ヲ築キ立テ、其ノ内外ニ多數ノ家來ヲ集メテ、軍事的ノ團體生活ヲ營ムニ至リタルハ足利氏ノ季世織田氏時代即チ元龜天正以後ノ現象デアツテ、此頃ヨリハ武家武人ノ住處ト其ノ領地タル知行所トハ全然別モノトナリ、戰爭ヲ職トスル侍ト農業ヲ事トスル百姓トハ、殆ンド完全ナル分業ヲ來シ、其ノ結果一方ニ於テハ經濟的進歩ノ一大要件タル都市ノ發達ヲ催カシ、他ノ一方ニ於テハ農民ニ比較的安全ノ地位ヲ與ヘ、群雄ノ爭ノ爲メニ農業ヲ妨ケラルルノ不幸ヲ免カル

- (7) 譜代ノ大名和田、畠山、三浦、佐々木ナドノ外ハ皆鎌倉ニ居ラズ在國ナリシ由、室鳩巢ノ献可錄ニ見ユ
- (8) 新井白石ハ武臣カ親兵ヲ有スルコトトナリタル始リハ奥ノ前後戰ノ時ヨリアアルト云ヘリ(白石手簡)

ルニ至ツタノデアル。

士農分離ノ現象ニ就テハ、徳川時代ノ學者ハ喧シク其ノ非ヲ鳴ラシ、之ヲ武備上及經濟上非常ノ惡風トナシテ攻撃シ、所謂ル土着論ナルモノヲ主張シテ「兵ヲ農ニ寓スル」ノ古制ニ復ヘサンコトヲ説キタル者鮮ナシト爲サズ。下文ニ詳述ス本來、武士ハ戰爭ヲ目的トシ専門的ニ武事ノミヲ講究スレバ其ノ技術ニ於テハ勿論大ニ優越スベキ筈ナルモ、元和偃武以來、太平打チ續キテ、上下一般ニ安迭ニ耽リ文弱ニ流レテ、士風墮落ヲ極メタリシカバ此ノ時ニ當リ身ヲ農間ニ置キテ親シク耒耜ノ勞ヲ取リ、閑暇アレバ山野ヲ跋涉シ狩獵ヲ事トシテ、其ノ筋骨ヲ鍛鍊スルカ如キ習慣ヲ養成シ、又時々相聚ツテ講武練兵ノ事ヲ勉ムル様ニナシタランニハ、固ヨリ云フ迄モナク城下居住ノ腰拔侍ニ勝ルコト萬々ナルベク、又人間ノ欲望ヲ抑制シ節儉ヲ尊ヒ奢侈ヲ禁ジ、夫ノ商人風ノ生活ハ淫靡ナリトシテ一切之ヲ排斥シタルガ如キ消極ノ經濟主義ヲ抱持シタル世ノ中ニ於テハ、田舎住居ノ簡單質朴ノ風俗ヲ是認スベキヤ勿論ノコトナレバ、此等ノ見地ヨリシテ當時ノ學者等ガ士農ノ分離ヲ以テ古武士ノ美德ヲ破壞シ、武士道ノ精神ヲ滅亡シタル惡現象ト見做シタルハ寫口當然ナルベシト雖、眞ニ國民經濟ノ發達史上其ノ利害ヲ批判スルトキハ、士農分離ノ結果多數ノ侍ヲシテ城下居住即チ都市生活ノ便ヲ知ラシメ、我國各地方ニ於テ殆ンド三百個所ニ近キ大小都市ノ發達ヲ催カシタルハ、封建制度ノ下ニ於テ不完全ナガラ商工業ノ成立ヲ得セシメ、當時疲弊ノ極ニ



陥リ居タル農村ヲ維持シタル唯一ノ大原因デアルト云ハサルヲ得ズ、若夫ノ學者ノ云ヘル如キ土着論ヲ實行シ、多數ノ侍ヲシテ、夫レ其城下ヲ引上ケテ、各々自家ノ知行所ニ退散セシメ、隨テ彼等ヲシテ武骨一邊ノ粗野ナル田舎武士タラシメンニハ、大名ノ城下ハ純乎タル Oppidum(防備シタル村落)ニ過ギズシテ我國ハ永ク村落經濟ノ域ヲ脱スルコト能ハザリシナラン。

西歐ニ於ケル都市經濟ガ古代ノ村落經濟ト近世ノ國民經濟トヲ結付ケタル中間ノ連鎖トナツテ、經濟史上重要ノ地位ヲ占ムルコトハ疑フ可ラザル事實ナルガ、我カ徳川時代ニ於ケル大名ノ城下ニ一種封建的ノ都市經濟ガ發達シタルハ、古代ノ村落經濟ト明治維新後ノ國民經濟トノ中間ニ介立スル重要ノ現象タリシコトハ、是レ亦我カ經濟史上否認スベカラサル事實デアアル、西歐ノ都市ト我カ大名ノ城下トハ其ノ根本制度及沿革ニ於テ多少ノ相違ナキニアラザルモ、農産物消費ノ中心トナリ、製造品供給ノ源泉トナリ、同時ニ一般進歩ノ要件タル欲望ヲ向上セシムルノ媒介トナリタルニ至リテハ、彼我全ク同一ノ效果ヲ現ハシタルモノト云ハザル可ラズ、仁井田好古曰ク「御城下、在中在中トハ郷村ヲ云フ其主と仕候處兩様に相成、在中は貨財を生するを主と仕、御城下は百貨輻輳する處にしてこれを國中に融通し、又他國に交易するを主と可仕儀と奉存候、御城下繁昌して百貨國中に融通仕候へば山中僻遠の地までも其餘澤及ひ候て自然と暮し易く御城下在中相持に相成候儀富國の御政と奉存候」云々ト洵ニ此ノ說ノ如ク、城下ノ繁榮ハ農村ノ爲メニ非常ノ利益ヲ與へ

タルコトハ吾人ノ辯明ヲ待タサル所デアル、然ルニ當時ノ學者中ニハ往々城下ノ繁榮ハ農村ノ爲メニ却テ有害ナルガ如キ説ヲ主張スル者アリ、例ヘバ山片蟠桃ハ「市井盛ナレバ田舎衰フ」ト云ヒ、肝付海門ハ「城下繁榮ノ國ハ農民大ニ困メリ」ト云ヘリ、蓋此等ノ説ハ必スシモ全然事實ニアラズト云フ可ラズ、現ニ徳川氏ノ初代江戸ガ俄カニ膨脹シタル際ニハ、其ノ周圍ニ於ケル農村ノ勞力等皆一時ニ江戸ニ吸集セラレテ其近隣地方ハ之カ爲メニ却テ大ニ衰頽ヲ招キタル事實ナキニアラズ、而シテ斯クノ如キハ甚タ稀有ノ例外デアツテ一時ニ俄然ト大都會ノ成立シタル場合ノ如キニ於テハ、稀レニ此ノ現象ヲ來スコトナキニアラザルモ、概シテ都會ノ繁榮ハ之ニ接近スル農村ノ爲メニ莫大ノ利益ヲ與ヘ、後者ノ改良進步ハ専ラ前者ノ繁榮如何ニ歸因スルモノナルコトハ、世界ノ歷史上ニ蔽フ可ラザル事實デアル、古キ田法書ノ一トシテ傳ヘラルル「地方」様記」ノ著者葛間勘一ガ「商人多キ村方ハ免相高クトモ不衰微者也」ト云ヘルノ主意モ亦畢竟スル所此等ノ事實ヲ證明スルモノト云フベシ。

上古村落經濟ノ時代ニ於テハ一般農民ノ需用ハ其ノ居村若ハ近傍ニ開カレタル時々ノ市場ニ於テ供給セラルルカ、又ハ行商ノ手ニ依テ供給セラレタルモノニ外ナラス、例ヘバ今現ニ地名トシテ残り居ル伊勢ノ四日市ヲ始メトシ全國處々ニ二日市三日市又ハ七日市、八日市、十日市等ノ名稱アル市街地ハ上古ハ皆各々其ノ名ノ日ニ於テ定規ノ市場ヲ開キタルガ後來段々ニ發達シテ、今日

(10) 夢ノ代  
(11) 東北風談

ノ如キ市街地トナツタノデアツテ、其ノ始メハ單ニ其日限りノ市場ニ過キザリシナリ、又此ノ時代ニ於テハ各地方ニ行商ナルモノアリ、村々ヲ徘徊シテ農民ノ用ユル必要品ヲ負販シ、又大工及細工師ナドモ其ノ道具ヲ携ヘテ村カラ村ヲ巡廻シ、或ハ一ヶ所ニ數十日モ滞在シテ仕事ヲスルト云フノ風俗ナリシガ、元龜・天正以後大名ノ城下ガ全國到處ニ成立シテ、漸々都市ノ形ヲ具備スルニ至ツテ、農民ノ需用ハ一般ニ其ノ附近ノ城下ニ於テ充實スルコトナリ、隨テ彼等ノ生産物モ亦其ノ城下ヘ積出シテ金錢ニ換ヘルト云フノ狀態ニ推移シタルモノニシテ、是レガ即チ我國ノ經濟史上ニ重要ナル都市經濟ノ現ハレタル濫觴デアル、然レドモ此ノ變化カ最モ著ルシク現ハレ來ツテ大名ノ城下ガ眞ニ分配消費ノ中心トナリタルハ、<sup>(12)</sup> 徳川氏ノ中葉、元祿以後ノ事ニシテ、ソレ迄ハ矢張事實ニ於テ村落經濟ノ憐レムベキ狀態ヲ免カレサリシハ祖徠ガ「政談」ニ自分ノ少年時代ニ於テ見聞シタル記事ヲ掲ケタルニ徴シテモ明ナリトス、然ルニ元祿以後享保ノ頃ニ及ンデ、世上俄カニ奢侈ニ赴キ、上下競ツテ驕豪ヲ事トスルニ至リシカバ、當時ノ有識者ハ皆之ヲ憂ヘ、士風ノ墮落、民俗ノ頽廢ヲ叫ンデ、純朴敦厚ナル古ヘノ狀態ニ復ヘサンコトヲ冀圖シ、其結果ノ一ツガ前ニ述ヘタル侍ノ土着論トナツテ現ハレタノデアツテ、此ノ土着論ノ主張者ハ熊澤了介、荻生徂徠等ノ如キ著名ノ大儒ヲ始メ米澤ノ荳戸太華、水戸ノ藤田東湖、仙臺ノ林子平等、何レモ盛ニ之ヲ鼓吹シタレバ、當時諸藩ノ政治家中ニハ、往々此等儒者ノ意見ニ動サレテ、土着論ノ實行ヲ

(12) 徂徠ノ政談ニ詳ナリ

試ミ、侍ノ城下居住ヲ止メンコトヲ企タルコトアリシモ、遂ニ其ノ目的ヲ達セザリシハ、抑モ亦故ナキニアラス。

薩州土州<sup>(13)</sup>及仙臺等<sup>(14)</sup>大藩ノ中ニハ古ヘヨリ郷土ト稱スルモノアリ、コレハ元來帶刀ノ武士ナレドモ、平素ハ農間ニ雜處シテ百姓ト同シク耕作ニ從事スルモノナリ、武州八王子ノ千人衆、眞田侯ノ同心、岡部侯ノ甲賀士<sup>(15)</sup>ナド稱スルモノモ亦殆ント類似ノ者ニシテ、儒者ノ所謂ル土着論ハ此等ノ者ヲ理想トナシ、以テ諸士ノ城下居住ヲ止メントスルノ意見デアル、而シテ此ノ意見ヲ實行セント試ミタルハ水戸、米澤ニ藩ヲ始メ其他ニ鮮ナカラザリシナリ、然ルニ皆、何レモ其ノ目的ヲ達セザリシハ大ニ理由ノアリタルコトニテ、ソレハ一ツニハ大名ハ其ノ家來ヲ多ク膝下ニ聚メ置ケバ彼等ノ威嚴ヲ維持スルニ於テモ、又タ實用上ニ於テモ、種々ノ便利アリシコトナルベク、又一ツニハ侍トシテモ久シク城下居住ニ慣レテ、都人士ノ氣風ニ浸潤シ居レバ、今更ラ田舎ノ土臭キ百姓生活ヲ厭フコト勿論ナルベク、殊ニ侍ノ妻子家族ナドガ住慣レタル城下ヲ離レテ、僻遠ノ農村ニ退去スルト云フコトハ實際中々容易ノコトニアラザレバ、此等ノ事情ガ土着不可能ノ原因タリシヤ疑ナシト雖、茲ニ今一ツ此ノ土着論ヲシテ殆ンド絶對ニ實行スルコト能ハサラシメタル大原因ガアツタノデアル、ソレハ他ニアラズ、元祿時代ノ頃ヨリ諸藩ノ財政上ノ都合ニ依リ、從來ノ知行制度ハ漸次所謂ル鹽祿制度(切米渡シ)トナリ、新タニ召抱ヘタル侍ハ勿論ノコト、先祖

(13) 太宰春臺カ或人ニ聞キシ所ニ依レバ薩摩ノ郷士ハ二萬人アリシト云フ(經濟錄)

(14) 土州ノ郷士ハ一領具足ト云フ(同上)

(15) 昇平夜話下篇卷之二

ヨリ代々其家ニ仕ヘタル譜代モノマデモ、其ノ俸祿ハ知行渡シヲ止メテ代ハルニ切米渡ヲ以テスルノ制トナリ、諸藩ノ侍ノ大部分ハ土着スベキ領地モ無ケレバ、今之ヲ農村ニ土着セシメントスレバ復タ新タニ夫レ夫レ其土地ヲ分與セザル可ラサルニ至ツタノデアル、是レ土着論ノ實行ヲ不可能ナラシメタル大原因ナリト云ハザル可ラズ、加之ナラズ廩米制度ハ當時一般ニ發達シツツアツタ、貨幣經濟ノ結果ナルト同時ニ又タ其ノ發達ヲ促進スルノ原因トナリ、兩々相待ツテ益々城下ノ繁榮ヲ來スニ至リシカバ、假令一方ニ於テ家中諸士ノ奢侈ヲ獎勵シ、武道ノ頌廢ヲ招クノ弊害アリタルモ、其ノ大勢ノ趨ク所奈何トモ爲ス可ラズシテ全國ニ散在スル三百個所ニ近キ大名ノ城下ハ各々其ノ分限ノ大小ト、其ノ地理ノ便否ニ應ジテ、自然ニ商工業ノ中心トナリ、農産物ノ聚散場トナルニ至ツタノデアル、蓋武道ト經濟トハ矛盾ノ點鮮ナシトナサズ、富ハ兵ヲ弱メ商業ハ士風ヲ傷ルト云フコトハ、洋ノ東西ヲ問ハス、一般ニ認メラレタル事實デアツテ、城下ノ發達即チ商工業ノ隆興ハ、就中此ノ矛盾ヲ證明シタル一大現象ナレバ德川時代ニ於ケル經濟上ノ進歩ハ、或ル意味ニ於テ武道ノ犠牲ニ依ツテ得タル報酬デアル、否文明ノ向上ハ何レノ國ニ於テモ皆封建的ノ「みりたりずむ」ヲ排除シテ「こんまーしやりずむ」ノ勝利ヲ意味スルノデアツテ、之カ爲メ武道ノ弛ミタルハ寧ロ當然ノ次第デアル。

之ヲ要スルニ我國都市ノ位置、即チ大名ノ城下ハ前ニ述ヘタル如ク、主モニ軍事上ノ利害ヨリ之

ヲ選擇シタルモノナレバ、經濟上自然ノ成行ニ一任スル時ハ、都市トシテ勿論容易ニ成立スベカラザルガ如キ不便ノ地ニ之ヲ成立セシメタル所鮮ナカラザルノミナラズ、徳川氏ノ政策上全國ヲ小領土ニ分割シテ、夫レ夫レ適當ノ地點ニ諸大名ヲ分封シタルモノナレバ、其結果宛モ「五十里有市」ト云フ王制ノ如ク、<sup>(16)</sup>適當ノ距離ヲ保ツテ到ル處ニ大小ノ都會ヲ散布シタルガ如キ奇觀ヲ呈スルニ至ツタノデアル、是レ實ニ我カ封建制度ノ最モ著ルシキ特徴デアツテ、偶然ニモ幼稚ナル村落經濟ヲ不自然的ニ都市經濟ノ方向ニ進マシメタル一大原因タルコトハ疑ヒナキ事實デアル、然レトモ封建時代ニ於ケル大名ノ居城ノ位置ハ今日ノ世ノ中トナリテハ或ハ無意義ノ現象トナリ、例ヘハ何十萬石ト號スル大藩ノ城下ニテモ今日ハ全ク經濟上ノ價值ヲ失テ年々歳々衰退ヲ招キツツアルト同時ニ、或ル他ノ場所ニ至テハ、之ニ反シ、封建時代ニ名モナキ一寒村ガ俄然ト發達シテ一大都市トナリタルガ如キ實例ナキニアラサルモ、兎ニ角過去ノ歴史ヲ回顧スレバ封建時代ニ於テ不自然的ニ成立セシメタル大小幾多ノ都市ハ一般經濟ノ發達上多大ノ貢獻ヲ爲シタルコト何人モ否認スベカラサル所ナルベシ、唯タ憾ムラクハ其ノ成立ノ根本ガ純然軍事的ナリシカ故ニ其ノ經濟上ノ勢力、西歐ノソレノ如ク強大ナラズ、輒モスレバ武家武人ノ足下ニ蹂躪セラレテ當然發達スベキ程度ニ發達セザリシノミ、かんにんガむ魯ヲ希臘ノ例ヲ引キテ此ノ事ヲ論ジ、軍事的都市ハ商工的ノ都市ニ比シテ、其ノ基礎ノ甚タ薄弱ナルコトヲ説ケリ、<sup>(17)</sup>今我カ全國ヲ歴遊シテ各地方ノ盛衰ニ矚目スレバ或ハ思ヒ半バニ過グルモノアラン。

(16) 周官ノ地官ニアリ

(17) Western civilization (Ancient time) chap. 11.